http://decfamily.p1.bindsite.jp/2016/

We 13R

No.139　16/12/15

白妙の

百人一首を何とか覚えてもらうために、この通信でも大切なことなどをちょっとずつ話題にしてみようと思う。今回はNo1～No20の歌について。

まず、冒頭の天智天皇の歌は、さすがに一首目だけあってほとんどの人が覚えている。

○秋の田の仮庵の庵の苫をあらみ
　わだ衣手は露にぬれつつ

ポイントは「苫をあらみ」の部分で、これは「…を～（形容詞語幹）＋み」の形で「…が～なので」の意となる。他の代表的な例としては「瀬を早み（流レガ早イノデ）」がある。一緒に覚えておこう。

さて、１～20に中には「白妙の」という語句を持つ歌が二首ほどある。授業で紹介した『クイズでわかる百人一首』（大伴茫人、ちくま文庫）の問題を見てみよう。

○春過ぎて夏来にけらし白妙の
　衣干すてふ天の香具山（持統天皇）

問題　「白妙の」はどういう意味か。
　①「衣」の枕詞
　②白い布の
　③白くて美しい

○田子の浦にうち出でて見れば白妙の
　富士の高嶺に雪は降りつつ（山部赤人）

問題　「白妙の」は、どういうものか。
　①「富士」の枕詞
　②「高嶺」の枕詞
　③「雪」の枕詞

答えは、「春過ぎて」の方は②、「田子の浦に」の方は③である。「白妙」は、楮などの樹木の繊維で織った白い布。歌の場合、ふつうは「白妙の」で「衣、袂、袖、帯、紐、たすき」などにかかる枕詞として用いられるが、この歌では、実際に「白い布の衣」が干してあることを聞いて、そこから夏が来たことを感じ取っていることになる。つまり、推定の助動詞「らし」の根拠である。

一方、後者の歌では枕詞となっていて、しかも、直後の語にかかるのではなく、離れた言葉にかかるきわめて例外的な用法となっているところが注目される。白色を強調する用法が多いという特徴もある。

＊

ちなみに、小テスト（歌の一部分の穴埋め問題）でどんなところを出題したくなるかというと、例えば修辞に関する部分で、五音の枕詞や、その枕詞が導き出す言葉（専門用語で「被枕」という）なんかは出題しやすい箇所となる。また、序詞では、例えば、

○あしびきの山鳥の尾のしだり尾の
　ながながし夜をひとりかも寝む（人麻呂）

だと、「あしびきの～しだり尾の」までが序詞で、それが「その長い尾のように」という比喩の関係で「ながながし夜」の「ながながし」を導き出すわけだが、その比喩部分（しだり尾の」）を聞いたり、その比喩が導き出す部分（「ながながし夜を」）を聞いたりしたくなるというわけだ。

基本的なところで言えば、歴史的仮名遣いを間違いやすい箇所（「衣ほす**てふ**」「誰ゆ**ゑ**に」「からくれな**ゐ**に」など）も要注意。

○天つ風雲の通**ひ**路吹き閉**ぢ**よ
　をとめの姿しばしとどめむ（僧正遍昭

には、間違いやすい箇所が一杯あるということだ。それぞれの歌を、こんな視点で見直してみると、覚える一助になるかも知れない。